

FIT2021 O-026

弁証法論理学が作る哲学、その歴史的論理構造

高原 利生

takahara-t@m.ieice.org 2021.08.27

目次

1. 問題、前提、基本概念	p1
2. 哲学生成の論理的時間順序	p10
3. 論理学の改良	p11
3.1 推論の改良	
・論理的網羅による	
・推論の仮説設定への統合による	
3.2 歴史による論理学の発展総括による	
4. まとめ	p15
謝辞	p16

1 問題、前提、基本概念

論理学がほぼ哲学に等しい

哲学 = 世の中の認識である世界観と

世の中の認識と変更の方法である論理学

人の知覚と**論理学**が、無意識に、潜在意識、態度、感情、常識、
生き方、社会を作っている

問題1 既存の哲学は、時代に合っていない。殆どの人に難し過ぎる

問題2 感情的直観的判断しかない。世論はこの集合

→1 論理的判断 2 正しい感情的直観的判断

感情、感性は重要だがなかなか変えられない。

1 問題、前提、基本概念

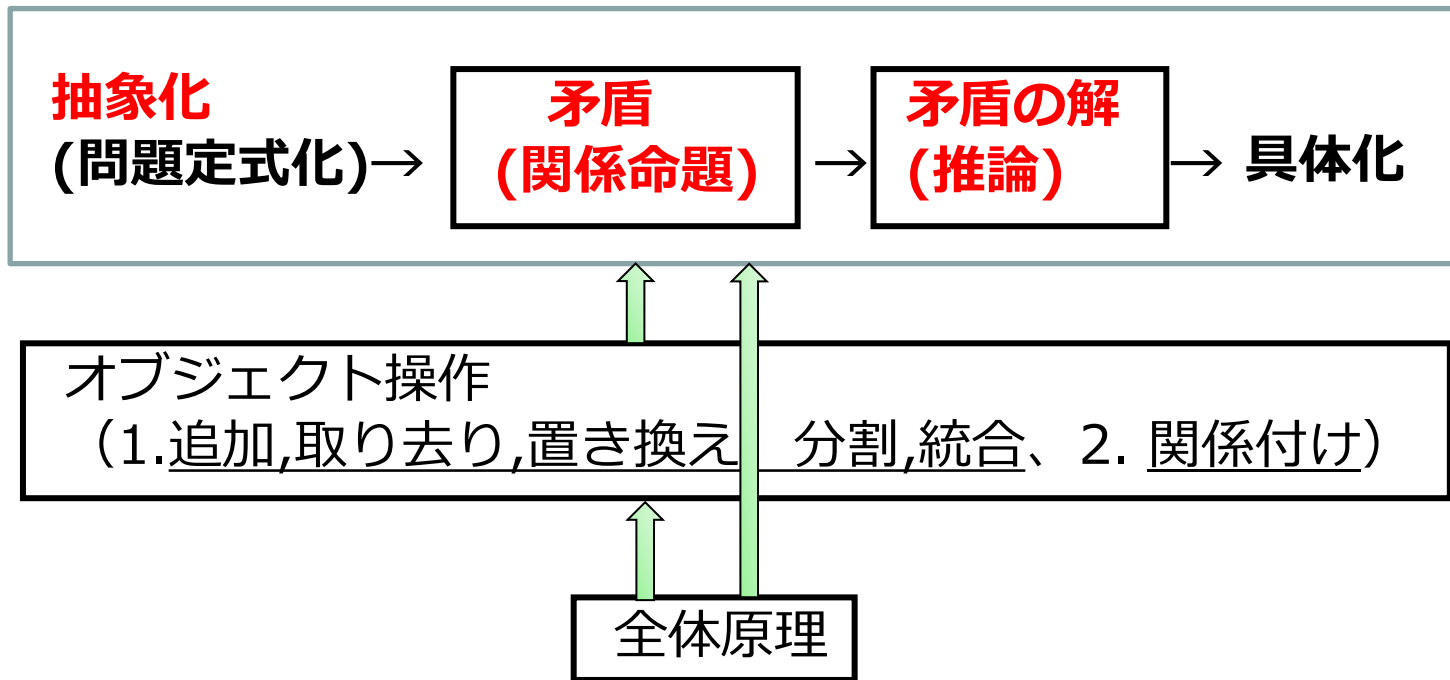
前提：1 文化・文明成立後は、歴史と論理は大まかに一致
2 形式論理は前提

事実＝あるもの

- ・1 客観的事実
- ・2 一次情報（観念）
- ・3 それを対象化した二次情報（観念）
- ・3の二次情報で述べる言説は常に**仮説**であり、その正しさは、検証され、正しいかどうかはその結果でわかる

真理や哲学（世の中の認識である**世界観**と世の中の認識と変更の方法である**論理学**）は変わり続ける

思考の構造(抽象化－推論－具体化)



オブジェクト間の関係を表現する関係命題

「関係命題－推論」と「矛盾－矛盾の求解」は同じ

矛盾モデル＝運動モデル

「オブジェクト1－関係－オブジェクト2」という矛盾モデル
関係し合い変化している世界の**近似**単位。

矛盾	説明
1. 差異解消矛盾	通常の変化、変更.
2. 両立矛盾	通常の矛盾。二項を(一時的に)両立 例: エンジンの大出力と軽量:機能と構造
3. (特別な) 両立 矛盾: 一体型矛盾 [TS2010,11] [FIT2016,17]	二項がお互いを変更し続ける両立 矛盾 例: 一体化と対象化, 思考と学習

基本概念:オブジェクト、粒度(抽象度)、網羅

三概念	説明
オブジェクト	ある 粒度 で事実から知覚と観念により切り取られ表現できる情報
粒度	空間的範囲、時間的範囲、属性
網羅	「抜け」の無いように全体を個々の要素で数え上げること

例えばある学校内の背の一番高い子を探すためには、その学校内の生徒の**網羅**が必要、つまり網羅された中から選ばれる必要があり、同時に網羅はある粒度に拠って行われる。

物理的網羅ができない場合→ **論理的網羅(種類、型) ⇒ 抜けのない正確な推論が可能**

思考の構造,位置

生きること = (知覚 ⇔ **生き方** ⇔ 認識と行動) ⇔ 事実

生き方 = ((潜在意識、態度、感情) ⇔ **哲学**) ⇔ 事実

哲学 = (世界観 → 価値観) ⇔ (思考の**論理(学)**)

矛盾モデル＝運動モデル 矛盾(運動)の分類

矛盾	結果の型	運動の型	変化の型	説明と例
差異解消矛盾	量的変化	永続的	値	<u>通常の変化、変更</u> 例: マントル運動
	質的変化	一時的	値から属性	<u>通常の変化が質的変化を起こす</u> 例: 地震
両立矛盾	二項の両立	一時的	値	同時に 岡山と東京にいる
	質的変化	一時的	属性	機能と構造(エンジンの大出力と軽量)
一体型矛盾	変化の持続	永続的		男と女。進化の機能と構造。 労働、交換と消費
				対象化と一体化(自由と愛)。批判と謙虚さ。

2. 哲学の生成の論理的時間順序

哲学 = 世の中の認識である世界観と

世の中の認識と変更の方法である論理学

2.1 認識と操作の論理の分かる事実が扱える→

まず論理学を作らねばならない。

2.2 論理学が世界観を含む

人の知覚と哲学が生き方を作る

3. 弁証法論理学の改良

論理学 = 論理の生成と運用の体系

論理は次の3段階

- ・問題を**矛盾**モデル (=関係命題) で定式化する抽象化
- ・**推論**
- ・具体化

3.1 推論の改良二つ

3.2 矛盾モデル(関係命題)の歴史的発展

による新しい論理学

今、把握されている推論

- ・演繹a : 命題の別の小さな粒度の命題への変更
一般の特殊化。情報が増えない
- ・演繹b : 「原因と結果」などの規則性把握に基づいた「正しい」推論の連鎖による(関係)命題の変更である
必ずしも正確でない
- ・帰納 : 粒度の命題の別の大きな粒度の命題への変更
特殊の一般化。必ずしも正確でない
- ・仮説設定 **特殊化の別の特殊化**

3.1の最初 **論理的網羅**による推論

演繹bを、論理的網羅による仮説設定に変えるとより正確

従来の帰納の命題の無条件の一般化を、論理的網羅の結果によって選んだ条件での一般化に代えるとより正確

→ 演繹と帰納が仮説設定に**(これだけで演繹と帰納が仮説設定に統一の理由)**

3.1の2つ目 **推論を仮説設定に統合**

仮説設定は、一般的な ある仮設という条件－実現 であり、

演繹、帰納は、特殊な 条件－実現 であるので、

仮説設定に、演繹、帰納を含ませる(本文と異なる)

同時に必要なこの二つが完全な推論を作る

3.2 矛盾モデル(関係命題)の歴史的発展

- 論理の歴史的結果が今の矛盾に固定化されて行く
(宇宙創成後)変化変更矛盾(変化・変更)と両立矛盾
→(生命誕生後)無意識の一体型矛盾(例:進化)
→(知的生命誕生後)意図的変化変更矛盾
→(技術開始後)意図的両立矛盾
→(文化・文明開始後)一方向一体型矛盾
→(今後)意図的双方向一体型矛盾

歴史が進むにつれ、論理学の対象は増え続け、方法、論理は高度になり続ける(「全体原理」も)

この矛盾の内容の歴史把握は、時代に合った論理学を可能にする

4. まとめ

正しく豊かになった論理

→

1 正しい論理的判断

2 正しい感情的直観的判断

謝辞: 大阪学院大学名中川徹先生のご支援、 関東学園大学本田正美先生のご助言に感謝申し上げます

文献: [Taka-44-47] 高原利生「未完成の哲学ノート」2019.3.25初版. 17版改版中, 制作 MyISBN

メールを送っていただければ
内容のpdfをお送りします。

takahara-t@m.ieice.orgまたは
ugg21948@outlook.com

概要はAMAZONを高原利生で
検索すれば見ることができる

